

國學院大學学術情報リポジトリ

木本雅康さんの急逝を悼む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 太一, Nakamura, Taichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000453

追悼

木本雅康さんの急逝を悼む

中村 太一

本年（二〇一八年）一月二四日、本会会員で長崎外国語大学教授の木本雅康さんが永眠された。享年五四。あまりにも早すぎる逝去であった。

木本雅康さんは一九六四年一月四日、富山県魚津市の生まれで、一九八二年四月に國學院大学文学部史学科に入学（ちなみに我々共通の師である木下良先生は、翌一九八三年四月に國學院大学文学部教授に着任されている）、一九八六年三月に史学科を卒業した。と同時に同年四月、國學院大学文学部文学科に学士入学し、一九八八年三月卒業。さらに、同年四月に國學院大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程前期に入学、一九九〇年三月に修了、同年四月博士課程後期に進んで一九九三年三月に単位取得満期退学している。そして一年間の大学院特別研究生を経て、一九九四年四月、長崎外国語短期大学講師に採用され、一九九七年一〇月助教授に昇任。二〇〇一年四月、同短期大学の四年制大学化に伴って長

崎外国語大学助教授になり、二〇〇五年一〇月教授に昇任した。

この間一貫して歴史地理学の立場から、駅路や伝路など日本古代の官道とそれに関連した官衙や条里制といった地域計画の復原に精力的に取り組み、歴史地理学会・人文地理学会・国史学会・交通史研究会等で活躍、条里制・古代都市研究会では評議員、古代交通研究会では副会長を務めた。また、兵庫県・那須烏山市・出雲市・福岡市・飯塚市等から委嘱を受け、自治体史の編纂・執筆や、埋蔵文化財の調査・整備の指導にあたっている。こうした日本古代の道路や交通制度に関する単著として、『古代の道路事情』（吉川弘文館、二〇〇〇年）、『遺跡からみた古代の駅家』（山川出版社、二〇〇八年）、『古代官道の歴史地理』（同成社、二〇一一年）、『日本古代の駅路と伝路』（同成社、二〇一八年）がある。

これに加えて木本さんは、文学畑では宮沢賢治の研究者として知られ、また歴史地理学の一環として太陽信仰と方位に関する研究にも取り組むなど、多方面でその才能を発揮した。ちなみに最初の刊行論文は、『（心象スケッチ）試論（一）』（『賢治研究』四四、一九八七年）であった。

木本さんに関して特筆されるのは、その『神出鬼没』ぶりであろう。古代史や考古学研究者のみなさんが、会う人会う人「どこそこの遺跡に木本さんが見学しに来ていた」とか、

「○○研究会で木本さんと一緒した」と教えてくださるのである。はては、韓国の史跡かどこかで、「向こうから見覚えがある歩き方の人が来たと思ったら、木本さんだったよ」という話を聞いたこともある。まさに「現地に足を運び、事例をこつこつと積み上げる」という鈴木靖民國學院大学名誉教授の評（八月一五日付朝日新聞夕刊文芸批評面「歴史地理学 牽引役をしのぶ」中のコメント）そのままの研究者であった。各種の学会や研究会の討論で、全国の類例や留意すべきポイントを必ずと言って良いほど紹介・指摘されていたことも含め、その研究姿勢は木下先生を彷彿させるものであった。

七月一日、古代交通研究会と本会の共催で「木本雅康さんを偲ぶ会」が行われ、第一部では古代道路研究に関わる木本さんの業績が、第二部では献杯とともにその人柄やエピソード等が語り合われた。前述の新聞記事は、偲ぶ会当日の様子を枕に、木本さんの業績等を紹介したものである。この会には約八〇名の方々が参集されたが、特筆すべきは、北海道から九州に至る広い地域から参加があったことだろう。また、所用により参加できず、お手紙等をくださったのも遠方の人が多かった。人数だけではない、その空間的な人脈の広がりも、木本さんの人柄や研究姿勢を如実に示すものといえよう。

日本の古代交通・道路研究分野は、三年前の二〇一五年一

月に逝去された木下先生に続いて、有力な牽引役を相次いで失ったことになる。それでも木下先生は、九三才を目前に亡くなられる少し前まで著書を出し続け、その研究成果を纏め上げたうえで自ら引退を宣言されていた。このため私たちは、研究面はもとより情情的な面でも、ある程度覚悟を決める猶予を与えられた。しかし木本さんの場合は、研究者として全盛期を迎えたさなかの不慮の病、そして急逝というあまりにも唐突な出来事であった。病床で最後まで取り組まれていた『日本古代の駅路と伝路』は、没後の刊行になったものの出版することができた。しかし同書の最後に記されているように、今後取り組むべき研究計画もまた、まだまだ有されていた。こうした、この先に挙げられたであろう研究成果を想像しただけでも、ご本人はもとより、私たちにとっても無念きわまらない「研究の中断」であったと言わざるを得ない。